

告発！『医療過誤の現場から』

写真 伊藤隼也

私から『記憶』を奪った悪夢の点滴

宮城 仙台市
関根萬司さん
(41歳)

「朝何時に起きて、朝食は何を食べたのか、1時間もするとまったく思い出せません。食事をしたことさえ記憶に残っていない。睡の中に何も残らないので、自分がいま、おかれている状況が、夢なのか現実なのか区別がつかないのです」

記憶障害を負った時から、関根萬司さん(41)の心安らぐ日は、一日たりとてない。必死に記憶を探り、一人苦え込み、苦悶する夫の姿を、妻の美和さん(38)は、日に何度となく見るといふ。

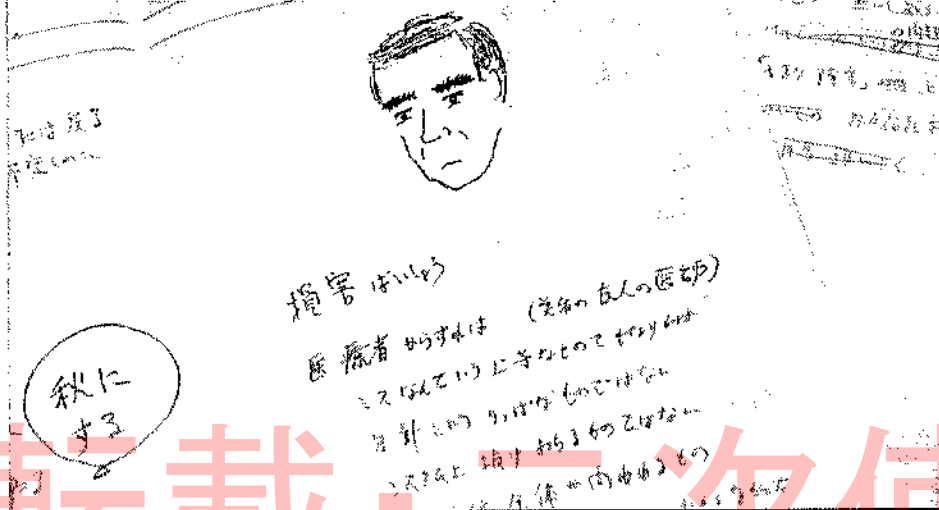
「2年春から胃の痛みを訴えていた萬司

さんは、東北労災病院(宮城・仙台市)で「胃の悪性リンパ腫」と診断され、98年7月14日、胃及び脾臓の全摘手術を受けた。手術は無事成功。しかし、その手術後に信じられない医療ミスがおきたのである。

術後しばらく、通常の食事ができない萬司さんの栄養補給は、すべて点滴でまかなわれた。順調に回復すれば、約2週間ほど点滴をはずして通常の食事に切り換わる予定だった。

7月28日の昼食から、点滴と併用して流動食が開始された。しかし、その直後から萬司さんは腹痛、嘔吐、下痢などが続き、5日後の28日からは、再び点滴の

▲写真上:事故後、家族で行った旅行のビデオを見る萬司さん。何も思い出せない。自分になんか違う人間のような感じがする。
▲写真下:記憶の補助に書いた萬司さんのメモ。仙台市若菜区にある「東北労災病院」。仙台市内でも有数の大きな総合病院である。



みの栄養摂取となった。過誤はこの点滴の中身に潜っていた。点滴の中に「ビタミンB₁₂」がまったく入っていないのである。栄養補給が点滴のみの場合、その中に「ビタミンB₁₂」を入れることは、医療従事者の常識であった。にもかかわらず、主治医は、それを怠っていたのである。

結果、萬司さんの体内にはビタミンB₁₂が欠乏し、脳の膨気とも言われている「ウエルニツケ脳症」を発症。さらに驚くべきことに、病院側は、発症後もビタミンの欠乏、ウエルニツケ脳症だと判断できず、見当違いの治療を続けたのである。

萬司さんは、致命的な後遺症である「記憶障害」を一生背負うこととなってしまった。

「手術後1カ月たってても少しも状態が良くなりません。寝せ紐っていく夫が、錯乱状態になったときは、いよいよ駄目、死ぬんじゃないか、とも思いました。死には至らなかつたとはいえ、夫の脳に障害を与えた病院の過失は、けっして許すことはできません」(美和さん)

記憶喪失とは過去の記憶を失ってしまうものだが、萬司さんのこの障害は、記憶の積み重ねができないというもの。過去の記憶はある。判断力もある。外見上は健常者と変わらないように見えるが、

転載



▲「記憶を補うために書いたノートですが、それを読み返しても何一つ思い出せない。私にとってこのノートは、逆にとても怖い物なんです」(萬司さん)

自分が見聞きしたこと、話したこと、経験したことが一時間もしないうちに頭の中から消えてしまうのだ。事故以降の記憶がまったく積み重ねられないのである。「失った記憶力を補うために、自分がしたこと、そのとき感じたことをメモに取るようにしたのですが、メモの場所、メモをこる行為すら忘れてしまう。夫は弱音を吐かない人ですが、他人が考える以上につらいと思います」(美和さん)

萬司さんの記憶の中には入院してからこのことは何も残っていない。しかし、過誤を許さないという感情は記憶されている。

「あの医師は、私の障害がどんなにたいへんなことなのか、きつと認識していないと思います。もし、疑似体験させられるのなら、彼にこの苦しみを味わわせてやりたい。医師は自分の犯した過ちをきちんと認め、私の目の前に来て謝罪すべきです。それが、人としてあるべき姿ではないでしょうか」(萬司さん)

関根さん夫婦は、'98年12月に病院側を提訴。一方、主治医は、「裁判中なのでノート」コメント」と答えている。

障害を負ってから3年後の'98年9月、関根さん夫妻に3人目の子、初めての女の子が誕生した。愛娘と過ごす毎日は、萬司さんにとって、とても重要である。

「娘は可愛いし、娘と遊ぶ時間は本当に楽しい。でも娘の顔も覚えられないし、娘がいることさえ忘れてしまう。娘を見るたびに驚いてしまうんです。それが悔しいし、つらい……」

母と遊ぶ娘の後ろ姿をジッと見つめながら、萬司さんは悲しきように語った。